

ハウスミカンの次年度産にむけた秋季管理

佐賀県果樹試験場 常緑果樹研究担当 池田 繁成

平成一七年産ハウスミカンも大部分が終了し、次年度産の加温開始まで二ヶ月を切りました。最近の情勢としてA重油価格の上昇が著しく生産経費が高騰しています。

よって今後加温開始までの期間で樹勢回復や加温後の着花の安定をはかり、単収増加や品質の安定化により、個々のハウスの収益性を向上させていくことが重要です。

夏芽利用型

樹勢回復対策

(一) 土壤改良

品質向上のために水切によって減少した細根を加温開始までに回復させておく必要があります。

夏芽利用型では夏季せん定後に細

根が発生しはじめ夏芽の伸長に伴って細根量も増加します。

よって今後の中耕などの断根を伴う作業は、発生した多くの細根を切つてしまひ樹体にかえつてマイナスとなる恐れがあります(第一図)。

今月以降、土壤改良管理を行う場合には、有機物や石灰資材の施用は表面施用にとどめ、せん定枝葉チップや発根促進資材(クエン酸資材など)を活用し細根増加をはかります。

(二) 樹体栄養管理

中期加温園で夏芽母枝の緑化途上にあるハウスでは極力母枝の充実をはかっていく必要があります。

窒素主体の葉面散布を実施し緑化促進をはかってください。また一〇月上旬は追肥を実施する時期ですが、

樹体への速やかな吸収を図るため速効性の肥料を用います。

年間施肥量の二五%を目安に施用しますが、樹勢や園地の土壤条件に応じて加減してください。

安定生産対策

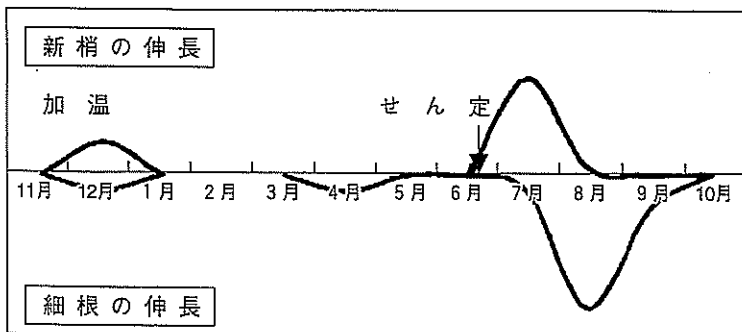
(一) 秋芽発生の抑制

夏芽母枝充実後に秋芽の発生を見ると加温後の着花量の減少や園地内で樹体間の着花バラツキの原因となります。

本県の気象的には一〇月上旬頃までは秋芽が発生する恐れがあり、園地の観察を良く行つて早めの対応に努めてください。

秋芽抑制には植調剤(フィガロン乳剤)の使用が重要なポイントとなり、発芽極初期の散布が最も効果的

第1図 夏芽利用型ハウスミカンにおける細根の生育パターン(イメージ)

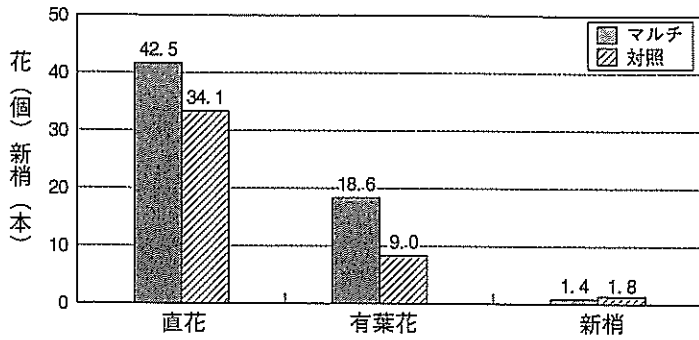


です。

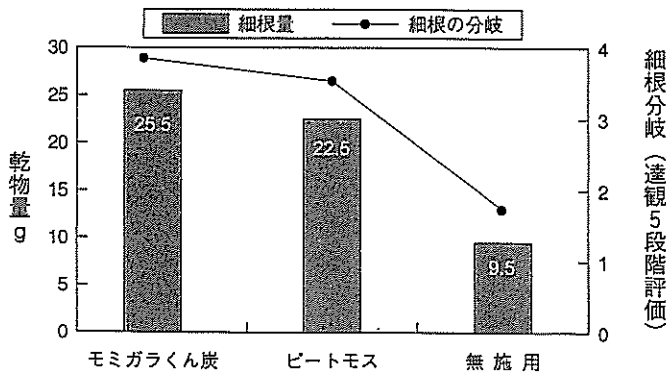
詳しい散布法については七月号に掲載されていますので参考にしてください。また加温日に近接した散布は発芽のバラツキにつながる恐れがあり、散布は加温予定日から四〇日前には終えるようにしてください。芽かきなどを併用しながら総合的な対応を行います。

(二) 葉面散布・反射マルチ

加温前のリン酸剤の葉面散布は加



第2図 反射マルチが加温後の着花に及ぼす影響



第3図 有機物の土壌スポット施用による細根の生育促進効果 (施用中晩柑)

・有機物施用量：20L/樹
施用法：4ヶ所/樹、5L/1ヶ所

温後の着花を増加させる効果があります。

加温予定の五〇日前頃より定期的に五〜六回の散布を行います。また樹冠下に反射マルチを設置することで、樹体に受光量が増加し母枝の充実と花芽分化促進が期待できます (第二図)。

(三) 土壌水分管理

秋季に節水管理として樹体に適度な乾燥ストレスを与えることで、秋

芽の発生を抑制するとともに加温後の着花増加が図られます。

しかしながら過度の土壌乾燥は加温後の発芽のバラツキや落葉を助長しますので、気象の推移や樹体反応をみながら適度なかん水を実施してください。

春芽利用型

樹勢回復対策

(一) 土壌改良

夏芽利用型ハウスミカンでは夏季后半定後の夏芽伸長期に細根発生がピークとなりますが、春芽利用型では加温後新梢の伸長期に細根発生もピークを迎えます。

よって土壌改良の時期としては収穫を終えた後で、加温予定日の一〜二ヶ月前が適期です。硬く締まった土壌を中耕などで軟らかくして、加温後により多くの細根が発生する様な環境を整えておきます。

樹勢回復には部分的な中耕時の有機物のすき込みが有効です。

中耕によって切断された古い根から多数の新根が発生し、地下部の更新が図られます。二〜三年で園地全体の中耕が終えるよう計画的に実施してください。

また土壌中の腐植含量が高くなりすぎると、ミカンネコナカイガラムシの発生を助長すると言われており、施用する有機物としてはビートモスやヤシガラなどの分解しにくい資材が適しています。

果樹試験場における土壌改良試験ではモミガラくん炭の施用効果が高く、スポット的に土壌と混和すると細根の生育促進がはかられます (第三図)。

果樹試験場における土壌改良試験ではモミガラくん炭の施用効果が高く、スポット的に土壌と混和すると細根の生育促進がはかられます (第三図)。

(二) 石灰資材の施用について

ミカンの細根が生育するのに適したpHは五・五〜六・二程度です。

よって土壌pHをこの範囲に維持することが、樹勢維持には重要となります。

夏芽利用型ハウスミカンでは収穫後に大量の水戻しを行うため土壌中のアルカリ成分が園外へ溶け出し、石灰資材を投入しないと徐々に土壌が酸性化していきます。

一方で春芽利用型の場合は秋芽の発生を抑えるため収穫後も天井ビニル被覆し、節水管理とする園地が大部分であると思います。

この場合は夏芽利用型と逆に土壌中に養分が集積しやすくpHは徐々に高くなるケースも考えられます。

よって春芽利用型ハウスミカン園に石灰資材を施用する場合は、事前

に園地の土壌 pH を確認してから行ってください。

(二) 樹体栄養管理

中期加温園と同様に一〇月上旬が施肥時期となります。年間施用量の四〇%を目安に施用します。

また収穫期に苦土欠乏による葉の黄化などの養分欠乏症が多発した園地では、土壌改良とともに葉面散布による養分補給も併せて実施してください。

安定生産対策

(一) 枝梢管理

秋芽の発生が見られなくなった後間引きせん定を実施し、樹冠内部への日照量確保による加温後の着花確保と新梢発生促進に努めてください。

(二) 土壌水分管理

収穫後は節水管理とし秋芽の発生を抑制することで加温後の着花促進をはかりますが、過度の土壌乾燥は樹勢回復の妨げになるため、園地条件に応じたかん水対応をお願いします。

生産環境の整備

間伐・縮伐

樹の若返りや生産性の向上をはかるため苗木園への改植が進んでいますが、密植園では樹冠外周部の枝が立ち気味となりやすく、着花が不安定となり、結実しても高品質果実生産が難しくなります。

また日照の確保が難しい部位が多いと加温後の温度管理も難しくなります。

間伐や縮伐を行いそれぞれの樹が独立樹となるよう整備を行ってください。

周辺水路の整備

本年は台風の襲来もなく推移していますが、今後気象状況によつては秋雨による集中豪雨も予想されます。

大量の降雨の園内への流入と停滞は、秋芽の発生を助長する等の悪影響を及ぼします。

ハウス周辺の集配水路の保守・点検を行い園外へ速やかに雨水が排出されるよう努めます。

加温機の点検整備

A 重油価格が高騰しており現状のままでは推移すると昨年と比較して生産経費の大幅な増加となります。

加温開始前に加温機の点検整備を確実に実施し、暖房効率を極力高めるよう努めてください。